ギリシア的世界史像

——その形成とラテン語世界への伝達——

藤縄謙三

【要約】ヨーロッパ人の伝統的な世界史像においては、歴史の中心が東から西へと移行するが、この歴史像はギリシアに成立した特殊な性格の歴史学に由来する。ギリシアの歴史学は、自国のことよりも、むしろ外部の民族のことの記述から始まつたという独特の性格をもつ。そこには、地理的意味での世界全体への関心と、自民族を脅かす強大な外部勢力への敏感なる関心とがあつたが、この二つの性格をギリシアの歴史学は常にもち続けた。かくて、ペルシア戦争前後にペルシア史、次いでギリシア史が書かれ、またマケドニア、次いでローマが興隆すると、直ちにそれら新興国の歴史が書かれた。前一世紀に、これまでの成果が綜合されて、オリエントからローマに至るまでの歴史像が成立した。その特に明確な形のものがローマ人、とくにキリスト教徒に受容されて、後のヨーロッパに伝えられたので、かの伝統的な世界史像が成立したのである。

一

ヨーロッパにおいては、歴史はオリエントに始まつて、ギリシア・ローマを経て、中世以後のヨーロッパへと発展して来たものとされていた。中国やインドや日本の歴史がそれぞれ孤立して考えられている東洋史と比較すると、大きな相異がある。即ちヨーロッパ的世界史像においては、異つた諸民族の歴史が連続させられ、舞台が移動する歴史像になつているのである。このような歴史像の相異が生じたのは、もちろん東洋と西洋との歴史の展開の仕方が異つたためだとも考えられるが、もつと直接的には歴史叙述の伝統の相異のためである。王朝の交代を描く伝統的な中国史像が正史の伝統によるものである如く、上述のヨーロッパ的世界史像は、ギリシアにおいて成立した歴史学の特殊

な性格に依るのである。

ここでは、ギリシアの歴史家たちがオリエントからローマに至るまでの舞台の移動する歴史像を形成した過程、およびその歴史像がラテン語世界へ伝達された事情を明らかにし、この歴史像の元来の意味を考えてみたいと思う。この問題は一般の史学史では殆んど扱われていないけれども、史学史研究の最も重要な課題だとも思われる。約千年間にわたる期間の史学史の展開を扱わなければならず、私の学力を越えた課題であるが、敢て素描を試みることにした。

二

多くの国々において歴史叙述は、国家の役人（史官の如き）や神官が口碑と記録を国家的立場から整理して記述することから始まる。かくて、そこには、天地の生成や建国の偉業を語る神話・伝説と、王朝表の如き確実なる史料とが結合され、連綿として続いて来た一つの歴史像が描かれることになる。その最も壮大な例は、恐らく『旧約聖書』の歴史書であろうが、エジプト、メソポタミア諸国、ローマ、中国、日本などにも、それぞれ多少の相違はあるにしても、本質的には同様のものが見られる。これらの国々では、自国の歴史が天祐神助を背景として考えられているから、一つの封鎖的な価値体系を築くことになり、他国の歴史などは殆んど問題にされない。従つて、自国の歴史がそのまま主観的な世界史となつているのだとも言えよう。しかし、このような主観的な立場からは決して真の意味での世界史は成立しない。

このように普遍的に発生した歴史叙述の形態に類するものが、ギリシアに存在しなかつたわけではない。ヘシオドスの『神統記』などに見られるように、天地の生成や神々の誕生を語る神話もあつたし、また比類なく発達した英雄伝説もあつた。また他面では、多くのギリシアのポリスは、紀元前七百年前後から主要な役人の表など公的記録を保存し始め、後にかかる記録が各ポリスの歴史を記述するための史料になつたと考えられるのである。しかし、この政治的単位たるポリスの確立以前に、今日までの研究では未だ不明の過程を経て神話や叙事詩がギリシアの共有の財として発達してしまつていた。しかも、神話・伝説や歴史記録を国家的立場から整理する役人や神官がどこにも存在しな

かつたから、神話・伝説と政治的単位の歴史とは決して充分に結合されなかつた。かくて、宗教と政治とが合体して神話的な国家の歴史を統一的に描き定めるということがなかつたから、ギリシア人は自由に広い視野をもつて歴史的事象を眺めることができた。換言すれば、ポリスが民主的な社会であり、しかも多数のポリスの政治的対抗の上に、文化的統一があつたために、都市国家的制限も民族的制限もギリシア人の眼を覆うほどの力をもち得なかつたのである。[1]

このような事情の故に、ギリシアにおける歴史学の主流となるべきものは、政治的単位たるポリスとは殆んど無関係に成立した。最初の散文の史書は六世紀頃のミレトスの人カドモスの『ミレトス史』だとの伝承があるが、[2] この書物およびこれに類するロゴグラフォイの書物は、ヘレニズム時代の偽作だとの説もあり、[3] また真作だとしても、その内容は歴史と呼べるものではなかつたと考えられる。[4] かくてポリスを主体とする年代記的歴史（ὥροι, ὡρογραφία）の記述は、むしろレスボスのヘラニコスによつて五世紀後半に初めて確立されたものであり、[5] しかも彼は多くのポリスの年代記を書いたから、ソフィステース的な国際人の立場に立つていたのである。

ギリシアにおいては、歴史叙述が確立されるよりも相当以前に、自然哲学が確固と成立していた。この事実も、その他の国々の文化と比較して注目すべき特色と考えられるが、ギリシアにおける歴史学の主流の源は、むしろこのイオニアに起つた自然哲学、即ち人間をとりまく自然的世界一般への探究の開始にあるのである。[6] アナクシマンドロスは万物の始源（原理）の探求者であると同時に、最初の世界地図の作成者でもあつた。[7] この例が示すように、この学問は最初は未分化であつたが、次第に分化して行つたのである。即ち、一方では観察から理論的考察を通して原理を求める方向が純化して哲学となり、他方では実際に世界中を旅行して見聞を得るという方向が分化して、先ず地理学の如きものが成立し、更にそこから歴史学が分化して成立したのである。この最後の点について更に詳しく説明しよう。

紀元前五〇〇年頃に世界を探究してまわつたミレトスのヘカタイオスは、『世界地誌』と『系図』とを著し、とく

に前者によつて歴史学の成立に寄与した人である。[8] 彼がエジプトのテーバイで自分の家系を十六代まで遡つて神と結びつけたところ、神官たちはエジプトでは三百数十代（一万年以上）の間、人間の王が支配して来た証拠を見せつけたと伝えられる。[9] 前述の如く、ギリシアには史官の如き役人が神話や伝説を整理し保存するということがなかつたので、歴史的な時間の推移が極めて漠然としていた。[10] そのような神話的な混沌から脱して、歴史的な思惟を為すために、ヘカタイオスの如き経験は重要な契機となつたに相違ない。事実、五十年ほど後にヘロドトスも同様の経験をするが、彼は神官の証拠を素直に信じて、エジプトの歴史伝承に基いてギリシアの神話・伝説を再検討しているのである。[11]

また、旅行による地理的な研究は、更に政治的な世界の客観的認識へと導いた。世界地誌を書いたヘカタイオスはイオニア叛乱の際に、「ダレイオスが支配する全民族と彼の勢力を列挙して」、イオニア人に思いとどまるように忠告したという。[12] 旅行して外国のことを探求することによつて、世界の中におけるギリシアの政治的な地位を認識したわけであり、かかる認識に基いて政治史的な世界史が成立することになるであろう。イオニア叛乱の指導者アリスタゴラスは、スパルタの援軍を求めるとき、（恐らくヘカタイオス作の）[13] 世界地図をもつて行つて説明したと伝えられている。[14] 地理的研究は政治的問題とこれほど密接に関係があつたのであり、恐らく政治的関心の故に外部の強国のことを探究したこともあつたであろう。そしてペルシア戦争の頃には、ラムプサコスのカロンやミレトスのディオニュシオスが『ペルシア史』を書いているが、これらの外国史がギリシア人の書いた最初の史書（同時代史）であつた。[15]

かくてギリシアの歴史学は、地理学的意味での世界全体に関心をもつことから出発し、外国に却つて古い歴史を発見したり、ギリシアを脅かす外国勢力に直面したりして、成立したのである。そして、この起源の事情に見られる性格、即ち自然的意味での世界全体への関心と、外国勢力に対する敏感なる関心とを、ギリシアの歴史学は以後も常に持ち続けたのである。

① このようなギリシア史学とオリエントの歴史叙述との存立条件の相異については、ブルクハルト（新関訳）『ギリシア文化史』（改訂版）四巻四四〇頁以下参照。

② Dionysius Hal., *de Thucyd.* 5.
③ F. Jacoby, *Abhandlungen zur gr. Geschichtschreibung*, 1956, S. 55 f.
④ J. B. Bury, *The Ancient Greek Historians*, 1909, pp. 14 f.
⑤ F. Jacoby, op. cit., S. 74. idem, *Atthis*, 1948, pp. 68 f.
⑥ Cf. F. Jacoby, *Abhandlungen…*, S. 74.
⑦ Agathemerus, *Geog. Inform.* I, 1. 〔H. Diels, *Fragmente der Vorsokratiker*.[8] Bd. I. S. 82.〕
⑧ Cf. J. B. Bury, op. cit. pp. 17 f.
⑨ Herodotus, II, 143.
⑩ Cf. J. Forsdyke, *Greece before Homer*, 1956. pp. 35–38.
⑪ Herodotus, II, 142 f. 118 f.
⑫ Herodotus, V. 36.
⑬ Cf. L. Pearson, *Early Ionian Historians*, 1939, p. 28.
⑭ Herodotus, V. 49.
⑮ Cf. J. B. Bury, op. cit. pp. 21–24.

III

このようにしてギリシア人の知識欲は、広く世界へと向つていたのであるが、それでは彼らの世界に関する知識は、どのようにして体系づけられたか。換言すれば、彼らの歴史叙述において、世界の歴史はどのような構造をもつものとして考えられていたか。

まず、ギリシアの地理学者および一部の歴史家たちが、世界のことを記述する場合に、イベリア半島西端から始めて、ヨーロッパ大陸の地中海沿岸を東へ向つて記述し、アジアへ入り、更にアフリカの地中海沿岸に沿つて西へ戻るという順序で記述するのが普通であつた。[1] 地中海を周航するわけであり、この方法が当時の空間的意味での世界を把えるのに最も便利であつたことは、説明を必要としないであろう。ヘカタイオスの『世界地誌』(Περίοδος γῆς)の記述の順序も、上述の如きものであつたと推定される。[2] この書物には地理的なことだけでなく、歴史的とでも言うべき事柄も記述されてはいたが、そこに構想されていたのは、全体として地理的な世界像であつたと言えよう。

かかる空間的な叙述の原理ではなく、歴史的な叙述の原理として、年代順の方法が考えられるであろう。即ち、ギリシア人に知られていた限りでは、世界最古の伝承をもつエジプトの歴史から書き始める方法もあり得たであろうと考えられる。しかし、この最も常識的で穏当な原理は、紀元前一世紀の編集的な世界史の著者によつて初めて用いら

れたに過ぎない。ヘロドトスはエジプトの歴史伝承を素直に信じて、それに基いてギリシアの神話めいた歴史を再検討したけれども、古い歴史を有する国のことから記述して行こうとは少しも思わなかつた。

また彼は、諸国の風俗や慣習や宗教などを研究し、ギリシア人が文字や学問や宗教など多くの文化をエジプトその他の先進国に負うていることを好んで指摘している。[13] しかし、このような文化史的な思考方法は、彼の歴史の構成をまで決定してはいない。

彼の歴史構成の方法は、かかる学者的な形式とは関係がなく、政治的な問題情況に立脚して、政治史的な関連体としての世界を把握するのである。彼は、ペルシアの勢力を背景にハリカルナッソスの僭主となつていたリュグダミスとの抗争の結果、若くして一族とともにサモスに亡命し、後に（ペルシア戦争後ギリシアの中心勢力となつていた）アテナイへ来て、歓迎されたと伝えられる人である。[14] 彼の生涯について、少くとも以上の事実は一般に確実とされているが、そうとすれば、彼が身近に感じたであろうところの、彼にとつての政治的問題情況が、まさしく彼の著書の全体的構成に決定的影響を与えているのである。[15] ペルシア帝国の勢力圏内に生まれた彼の注意は、まずペルシアの勢力に向けられていたに相異ないと思われる。そして、この仮定が彼の著書を解釈する鍵となると私は思う。

その主題はペルシア帝国とギリシアとの衝突であるが、この衝突の発端であるリュディア王国の盛衰から書き始め、その背後のペルシア帝国の歴史に筆を進める。そして、このペルシアの代々の王の支配と外国征服が全体を統一する骨組になつており、エジプト（第二巻）やスキュティアとリュビア（第四巻）やギリシア（第五巻以下）の地誌や歴史は、それぞれカムビュセス、ダレイオス、クセルクセスによつて行われた遠征と関連して、物語の中へ編み込まれているのである。換言すれば、ヘロドトスは自らペルシア大王の立場に立つているかの如くにして世界を見わたしていることになる。ペルシア大王にとつては、世界は征服して朝貢させる対象であつたが、ギリシア人にとつては、世界とは研究の対象であつた。このような研究の立場に立ちつつヘロドトスは、外国の専制君主の活躍を手がかりとして、政治史的な世界史把握の原理を創造したのである。そして、

このように強大な国家の勢力を立脚点として世界の歴史を構成しようとする方法は、後述する如く、以後のギリシアの一群の歴史家たちによつて踏襲され、発展して行くことになる。

もちろん、全世界を遠征してしまう強大国が成立しない限り、この方法で全世界の歴史を把えつくすことはできない。しかし、ギリシアの歴史学は、その誕生以来の地理学との関係を保持し続けたから、地理的意味での世界全体に対する知識欲をもつている場合が多かつた。ヘロドトスも世界全体の地理を述べているし、後者する如くエプォロスやポリュビオスもその歴史書の一部を特に世界地誌にあてている。政治史的に世界全体を統一し得なくとも、少くとも地理的意味での世界全体を追求することを義務と感じていたのである。従つて、政治的な関連が広範になりさえすれば、それに応じて直ちに世界史把握が完全になつて行く。後にポリュビオスが、自分の時代こそ普遍史の記述に適した情況にあると述べて、その仕事に着手した事実は、この志向の伝統の存在を端的に示している。

① E. g. Ephorus, Libri IV-V. (cf. Jacoby, *FGrH*, II C, S. 48 f.), Strabo, Pseudo-Scymnus, Avienus.

② L. Pearson, *Early Ionian Historians*, p. 30.

③ Herodotus, II, 43; 49; 50; 58; 109; 123. V, 58.

④ F. Jacoby, *Griechische Historiker*, 1956, S. 11-28. (=Pauly, *RE*, Suppl. II. 213-247)

⑤ かかる解釈を為すためには、彼の著書の成立過程の問題に立入らなければならぬが、この点については別の機会に詳論したい。

四

ところで、ペルシア戦争後アテナイが次第に帝国の如き様相を帯びて来たので、ギリシアにも政治史把握のための立脚点ができたわけである。ヘロドトスの『歴史』の後半の部分では、既にそのようなギリシア側、とくにアテナイ側からの歴史把握の立場が明瞭になつていた。そして、やがて起つたペロポネソス戦争の歴史を書いたツキュディデス以後、ギリシア内部の戦争を主題とする同時代史が記述されることになつた。

そして、ここで注目すべきことは、ツキュディデスにおいて、ヘレネスのバルバロイに対する優越性が歴史理論として確立されたことである。いわゆる『古代史』の中で次

のように述べている。[1]

以上の外にも多くの点について、古い時代のヘレネスが現在のバルバロイと同様の生活様式をもつていたことを示すことができよう。

この言葉が示すように、ヘレネスがバルバロイと異るのは、歴史的に先進的であるからだと考えているのである。かくて両者の相異は本質的なものではないと言うのであろうが、しかし、彼がここでバルバロイという場合、テッサリア・マケドニア・トラキア・小アジアなどの人種的にギリシア人に近く、しかも後進的であつた種族のみを念頭においていたことは明らかである。事実それらの地では、彼自身が記述している如く、ギリシア語やギリシア的生活様式を採用して、ギリシア化(ἑλληνίζειν)されて行く過程が起つていた。[2] しかしエジプトなどの先進文化民族については、彼は何も記述していないのである。かくて、かかる視野の限界をもつて確立された歴史観ではあつたが、この先進性の意識に基く歴史理論は、後の世界史像の展開の基礎となつた。というのは、マケドニアやローマの如き、人種的にヘレネスに近く、しかもギリシア文化の影響を受けて発展した後進的新興国が、ギリシアに後続するものとして位置づけられて行つたのは、一面では、上述の歴史観を前提としていたからである。

ともかくヘロドトスに比して、ツキュディデスの視野は遙かに狭く、主としてヘラスに集中している。当時アテナイでは、カリアスの和約(四四九年)により、ペルシアに対抗する必要がなくなり、ペリクレスの指導下にヘラスに覇権を確立しようとしていた。このような問題状況の故に、ツキュディデスの注意はヘラスに集中したのである。しかし、このツキュディデスにしても、最後の第八巻では、ペロポネソス戦争の背後で操つているペルシア帝国の動きについて注意深く記述しており、世界史的な関連性への注意は、ギリシアの歴史家たちに常にあつたと言えよう。勿論これは、実際の政治が対外関係に敏感に呼応しつつ行われていたことの反映であるが、政治的必要が単にそれだけで終らずに、学的研究となつたところにギリシアの特長がある。

四一一年までで未完に終つたツキュディデスの後に続けて、クセノプォン、クラチッポス、テオポムポスの三人が

『ヘラス史』(Hellenica)を記述した。しかし四世紀の中頃には、マケドニアのプィリッポス王の勢力がギリシアの諸ポリスを圧倒するに至つたので、上記の三人のうちの一人テオポムポス(三七八―三〇〇頃)は、クニドスの海戦(三九四年)までで『ヘラス史』(Ἑλληνικαὶ ἱστορίαι)を打切り、[3]『プィリッポス史』(Φιλιππικαὶ ἱστορίαι)と題する大著を書いた。このことについてはポリュビオスが次の如く批判している。[4]

更にまた全体的構成に関しても、前述の歴史家(テオポムポス)には誰も賛成しないだろう。彼はヘラスの歴史を、ツキュディデスが擱筆したところから記述することを企て、レウクトラの合戦(三七一年)の時期、そしてヘラス史上で最も輝かしい時期に近づきながら、途中でヘラスとヘラスの企図とを見捨て、計画を変更してプィリッポスの事績を記述することにした。だが確かに、プィリッポスの(行為を扱う)企画の中でヘラス史を記述するのよりも、ヘラス史の企画の中でプィリッポスの行為を記述した方が、遙かに威厳があり、また正当でもあつたであろう。というのは、王の権威の擒になつている人でも、その能力があるならば、機会を見てその著作の名称と主役とをヘラスへと替えることを躊躇しないであろうから。ヘラス史から始め、或る程度進んでいながら、君主の派手な伝記に替えるなどということは、正常な判断力をもつ人なら、絶対に為さないであろう。もしも、前者の企画の目的は善美(の追求)であつたが、他方プィリッポスについての企画の目的は、利益(の追求)であつたのでないとすれば、他の何事がテオポムポスを強いて、かくも顕著な矛盾を見逃させ得たであろうか。

この言葉からも知られる如く、テオポムポスは「プィリッポスの(行為を扱う)企画の中で(広義での)ヘラス史を記述した」のである。伝存する断片から、ギリシア本土、ペルシア、イオニア、テッサリア、トラキアなどの、政治的事件ばかりでなく、地理や住民や慣習などについても記述されていたことが知られるが、これらは、王の遠征や外交を述べる際に、脱線して記述したものと考えられる。そして後にプィリッポス五世が、主題たる王の活躍を述べる箇所だけを集めさせたときには、全体で五十巻のものが十六巻に縮まつてしまつたと伝えられるほど、[5]脱線が多かつたのである。

このようにして、プィリッポスという専制君主の活動が全体の枠を構成し、その間に多くの脱線を含んでいたわけで、この歴史の構成はヘロドトス的であつたことが知られ

る。彼は（多分この主著より以前に）、『ヘロドトスの歴史の要約』を執筆しているから、ヘロドトスからこの構成原理を学んだことは明白である。彼は冒頭において、この著書にとりかかつた主たる理由は「エウロペが未だかつてプィリッポスの如き男を生み出したことがないという事実だ」と述べている。[11] この言葉からも、彼がヨーロッパに初めて出現した専制君主を見て、ヘロドトスの原理に倣つて歴史を記述したのだということが知られよう。

そして、この場合に注意すべきことは、彼が別にプィリッポスに傾倒していたわけではないということである。彼は一面ではこの王を高く評価したけれども、他面ではその人格の欠点を痛烈に非難している。[7] 従つて、彼が歴史を見る観点を変えたのは、ポリュビオスの推測するが如き理由によるのではなく、ギリシアの歴史がプィリッポスによつて操られていることを客観的立場より見てとつたからである。

このようにして、ギリシア外部のマケドニアという新興国家は、同時代のギリシア人によつて直ちに歴史の舞台の中心に位置づけられたのである。

テオポムポスと同じくイソクラテスの弟子と伝えられるエプォロス（四〇五―三三〇頃）は、これまでのギリシア史学の成果を綜合して、全体的な歴史像を描いた。ポリュビオスは、彼のことを「最初に、また唯一人、普遍史（τὰ καθολικοί）を書こうと企てた」として讃えている。[8] しかし、この意味は、ギリシア全体の歴史を書いたということに過ぎない。即ちギリシアにおいては、マケドニアの指導下にギリシアの統一が果されるというような段階、ギリシアの衰退期に入つて初めて、ギリシア史が書きまとめられたのである。その用いた参考書は、古い時代に関してはヘラニコスとヘロドトス、東方史に関してはクテシアスとクサントス、ペロポネソス戦争に関してツキュディデスなど、これらが主要なものであつたと推定されている。[9] 同時代史に近づくにつれて、叙述が詳細になるが、その方面では自身の直接的研究を主としたであろう。

しかし彼の歴史も、単なるギリシア史の枠を破つた構成と内容をもつている。その構成は、断片を配列して見ることによつて、ほぼ復原される。神話や伝説は信じられないとして除外し、ヘラクレスの子孫の帰還（ドリス人の侵入）

から記述し始め（第一巻）、次にギリシアのその他の地域の住民のことを説明し（第二、三巻）、続いて世界地誌を記述する（第四、五巻）。その際の記述の順序は、前述のヘカタタイオスと同様であつて、ヘラクレスの柱から始めて、地中海北岸、アジア、エジプトを通つて、出発点へ戻る。そして再びギリシア史に戻り、八・七世紀のスパルタ史（第六巻）、シケリア古史（第七巻）を述べ、次に舞台を東方へ移してペルシアの興起（第八、九巻）、ペルシア戦争（第十巻）を述べる。五十年期（第十一巻）以下、ギリシア中心の歴史を叙述し、息子によつて完成された最後の巻では、プィリツポスが主役を演ずる神聖戦争を扱う（第三十巻）。

世界地誌の記述は、全体的構成の中で占める位置から考えて、世界をギリシア人の活躍の舞台と見做して、挿入されているものと考えられ、記述の順序は地理学的であつた。歴史事実を述べる部分では、ペルシア史の部分、即ちヘロドトスがギリシア史と関係させて述べていた部分を除いては、ギリシア史が中心である。かくて彼において、空間的な世界構成と時間的歴史構成とが、原理的な分裂を示しながらも結合されているのが明白になつている。

① Thucydides, I, 6, 6.
② Ibid. II, 68, 5-6.
③ Diodorus Siculus, XIII, 42, 5.
④ Polybius, VIII, 11, 3-6.
⑤ F. Jacoby, *FGrH*, Nr. 115. (Theopompus) T. 31.
⑥⑦ *FGrH*. Nr. 115 F 27 (=Polybius VIII, 11, 1)
⑧ Polybius, V. 33, 2. (=*FGrH*, Nr. 70 T 7)
⑨ G. L. Barber, *The Historian Ephorus*, 1935, Chap. VIII.

五

上述のエプォロスやテオポムポスは、古典期の最後の歴史家であつて、次にヘレニズム時代に入る。[1] この時代には、君主個人の活躍に注意を集中する傾向――これは既にテオポムポスにおいて認められたもの――が強まり、とくにアレクサンドロス大王の活躍を扱う史書が多く書かれた。しかし、このアレクサンドロスの世界帝国理念や、東方世界との交流の活潑化は、それほど新しい世界史像を生み出しはしなかつた。というのは、この時代の傾向たるギリシア文化の世界進出ということは、既にエプォロスに明白に現われていた世界像、即ち全世界をヘレネスの活躍の舞台の

如くに見なす意識を、事実によつて実証したことに外ならなかつたからである。確かに、チャンドラグプタのところへ使いしたメガステネスの『インド誌』などが示す如く、地理的な知識は拡大した。しかし、ギリシア人が直接に触れるに至つたオリエント諸国の史料を利用して、改めて深く歴史を研究しようという意欲は、あまり起らなかつたようである。しかも必ずしも語学上の障害のためだけではなかつたことは、次の事実からも知られよう。

バビュロンの祭司ベロソス（前二九〇頃）と、エジプトの祭司マネトン（前二八〇頃）は、それぞれ『バビュロニア史』と『エジプト史』を比較的確実な史料に基いてギリシア語で記述した。しかし、これらの書物はギリシアの歴史家たちに利用された形跡がないのである。[2] しかもベロソスは天文学者としてはギリシア人の間に有名になつているから、[3] この頃のギリシア人は東方の占星術などには関心をもつたけれども、歴史には興味をもたなかつたのである。またユダヤ人の史家ヨセポスによれば、ディオスという人がフェニキア史を書き、[4] とくにエプェソスのメナンドロスという人は、ヘレネスおよびバルバロイの諸王の歴史を書き、とくにそれぞれの国の史料に依拠したという。[5] しかし、この二人の歴史書については、これ以上の伝えはなく、このようにギリシア人が外国語の史料を利用して書いたとしても、一般の歴史家たちに読まれなかつたことを示している。事実、後述するディオドロス、ニコラオス、トゥログスの如き編集的な世界史の著者たちは、いずれも東方のことに関してはヘロドトスやクテシアス（前五世紀末）に依拠して記述するのみであつた。

そして、かかる欠陥がここで現れたのは、これまで私が強調して来たギリシア史学の根本的な性格から見て、むしろ当然のことであつた。即ち、ギリシアの歴史学の主流は、強大なる政治的勢力に対する敏感なる関心に依て成立していたから、既に征服されてしまつた東方諸国の歴史を改めて研究しようという欲求は、普通の歴史家の間には全く起らなかつたのである。かくてオリエント諸国は既に遠く過去つた世界として、歴史像が固定してしまつた。その反面では西方の新興国ローマへの注目が直ちに始められた。

即ちポリュビオス（一九八―一一七頃）は、政治的理由で

ローマへ人質として連れ去られ、ローマの世界征服の歩みを内部から見るや、直ちにローマの世界統一を立脚点として、明確なる意識をもつて普遍史を記述した。例えば序文において、次の如くに言う。[6]

私の著作の特徴であり、また吾々の時代の驚異たることは、次の事実である。即ち、テュケーが殆んど全世界の事件を一つの部分に向かわせ、そして全体を同一の目的へと方向づけた。それに応じて歴史学は、テュケーが全事件の完成へと運んで行く操作を、読者の前に一見して見通せるように提出しなければならないのである。

その他いたる所で、極めて明確な世界史の理念を説明しており、また実際にその理念に従つて記述している。しかし彼の普遍史というのは、ローマが世界中に勢力を伸ばしたために「イタリアやリビュアの事件がアシアやヘラスのそれと編み合わされるに至つた」が故に成立するのである。[7]私たちが見て来た彼以前の歴史家たちも、すべて政治的に関係がある限りは追求して来ていたのであるから、ポリュビオスは決して原理的に新しいことを為しているのはない。むしろ、強大な政治勢力を立脚点として把握する伝統的な原理を、新しい大規模な事態に適用したのに過ぎないのである。その第三十四巻が地理的記述にあてられているのも、このことを示す。

ポリュビオスが擱筆したところに続けて、ポセイドニオス（一三五頃―五一）が記述し、またハリカルナッソスのディオニュシオス（六〇頃―前七以後）は、最古期から第一次ポエニ戦争開始まで、即ちポリュビオスの扱つたところより以前のローマ史を記述した。このようにして、ローマの世界支配の進行と殆んど同時に、その歴史が記述され、マケドニアに次いでローマという新興国も、ギリシア人の史家により世界史の舞台へ上げられたのである。

① ヘレニズム時代の史学史については、粟野頼之祐「ヘレニズム時代の史学史」（『関西学院史学』Ⅲ）に網羅的な概観がなされている。

② 現存の断片はすべてヨセポスおよびキリスト教史家の引用によつて伝えられたものである。Cf. Ed. Schwarz; *Griechische Geschichtschreiber*, 1957, S. 196-198.〔=Pauly, *RE*, III, 314 f.〕

③ Flavius Josephus, *Contra Apionem*, I, 129.

④ Ibid. I, 112. id. *Antiquitates Judaicae*, VIII, 147.

⑤ *Contra Apionem*, I, 116. *Antiq. Jud.* VIII, 144.

⑥ Polybius, I, 4.

⑦ Polybius, I, 3.

六

ローマ帝政成立期には、シケリアのディオドロス（前二一以後死）が、これまでの歴史家がなして来たような個々の民族や国家についての記述では、全体的知識を得るのに不便だとして、「最古の時代から始めて自身の時代まで記憶（伝承）に残つている全世界の事件を、あたかも一つのポリスの事件の如くに、可能な限り記述すること」を企てた。[1] ここに初めて、時間的にも空間的にも全体を含んだ世界史の理念が明確に現れたのである。しかし言うまでもなく、ローマの政治権力とギリシアの文化とが世界に君臨していた、あの世界的な時代の雰囲気が、かかる理念を生みだしたのであつたために、却つて彼の世界史の構想は、そのような情況を当然で自明のものとする安易な立場に立脚している。彼の『文庫』（*Βιβλιοθήκη*）と題する歴史書の内容と構成は次の如くである。

まず宇宙の生成や人類の発生から始めて、エジプトの神話や王朝史を述べ（第一巻）、次にアッシュリアからメディアに至る歴史（第二巻前半）、更にインド、スキュチア、アラビア、エチオピアなどについて記述する（第二巻後半、第三巻）。次に西方へ転じて、ギリシアの神話や伝説を述べ（第四巻）、続いてイングランドおよび地中海諸島について西から東への順序で記述する（第五巻）。次いで、トロイア戦争以後の歴史を、アポロドロスの年代学を規準として、同年代的（synchronistisch）に記述して行く。しかし、第九、十巻でリュディアやペルシアの歴史が扱われている点を除けば、第十五巻まではギリシア史が中心であり、ローマの事件なども同年代的に簡単に挿入されているに過ぎない。そして続く部分は、マケドニアとヘレニズム諸王国が中心であり、第二十三巻から最後の第四十巻まではローマ史が中心となり、カエサルのガリア遠征で終る。

このようにして、編年的な記述方法をとつたにもかかわらず、大体においてオリエント・ギリシア・マケドニア・ローマという継起的な歴史像になつていることが注目される。これは著者自身が意図したことではなく、彼の著書が、クテシアスやエプォロスからポリュビオスやポセイドニオスに至る十数人の史家たちの著書を、適当に要約して結び

合わせたものであつたために、これまでのギリシア史学の成果があまり作為なしに綜合された結果として起つたことなのである。即ち、強大な政治的勢力を対象として選んだり、それを立脚点として記述したりして来たギリシア史学の成果の反映なのである。

同じ頃ダマスコスのニコラオスも、『ヒストリアイ』と題する一四四巻の世界史を書いた。そこでは、まずアッシュリアとメディアの歴史が扱われ（第一、二巻）、次いでトロイア戦争以前のギリシア史に転じ（第三巻）、更にギリシア史とリュディア史とを交錯して述べ（第四、五、六巻）、リュディア史に関連してペルシア史に筆を進めている（第七巻）。ここまでは伝存する摘要によつて内容が知られ、その史料については、東方史に関してはクテシアスとクサントス、ギリシア史に関してはヘラニコスとエプォロスを、忠実に用いたことが推定される。[2] 第八巻以下の内容については殆んど不明であるが、一〇三、一〇四巻はミトリダテスについて、一〇七巻はスラについて述べ、一一〇巻がルクルスの勝利（前六三年）を、一一四巻はクラッススの敗北（前五三年）を、一一六巻はカエサルのガリア支配を含んでいた。そして一二三、一二四巻は前十四年の事件を扱つていた。[3]

以上の証拠から、自身の同時代史を非常に詳しく扱つたことが知られ、またヘロデ王に仕えた人であつたために、ユダヤ関係の歴史を詳しく扱つたことが知られているが、[4] このような特徴を度外視すれば、ほぼディオドロスの場合に似た構造をもつていたと考えられよう。

かくてローマ帝政成立期には、ギリシア史学の誕生以来の成果が綜合されて、ギリシア的世界史像とでも称すべきものが成立したのである。この頃にはギリシア人の政治的関心が稀薄となり、ツキュディデス以来ほぼ続いて来ていた同時代史記述は、この頃ほとんど絶滅していた。かかるギリシア史学の動向は、ユダヤ人ヨセポスの次の如き批判の言葉によつて示されている。[5]

自分自身の時代に大事件――それに比較すれば昔の戦争など全く些細なことになる――が起つているのに、（現代史を扱う）野心的な人々を座して批判しているギリシア人の歴史家たちを、私は当然、批難する。彼らは、（野心的な人々よりも）文体では優れているにしても、その企図においては劣つているのである。そし

て彼ら自身は、あたかも昔の歴史家の記述の仕方が美しくないかの如くに、アッシュリアやメディアの歴史を記述しているのである。だが実際は、彼らは記述の仕方においても判断においても同様に、昔の歴史家より劣つているのだ。何故なら、昔の歴史家たちは各々同時代史の記述に努めたのであつて、事件に直接に関与していただけに、その記述は明晰であり、虚偽を記せば、事実を知つている読者から恥辱を受けたのである。実際、未だ記述されたことのない事実を記述し、自身の時代の歴史を後世の人々のために述作することこそ、賞讃に価いするのである。勤勉な人とは、他人の著作の構成や配列を変える人ではなく、新しい事実を述べ、歴史の内実を自ら集成する人である。

このようにして、これまでの歴史家たちの成果を綜合して、全体的な歴史の叙述が成立したときは、同時に現代史記述が絶えたときであつたから、前述のギリシア的世界史像は、ギリシア人の間では固定したものとなつた。

ここに引用した言葉からも知られる如く、当時のギリシア人は昔の歴史家が既に扱つていたアッシュリアやメディアの歴史に興味をもつていたらしい。それは、当時の歴史家たちが、ペルシアがマケドニアに滅ぼされ、マケドニアがローマに滅ぼされるという大事件を身近に経験して、世界史における諸帝国の興亡を問題にしたからでもあつたろう。即ち、既にアレクサンドロス大王の同時代人たるプァレロンのデメトリオスは、『テュケーについて』という書物の中で、次の如く述べている。[6]

あなたは五十年前にペルシア人やペルシア王、あるいはマケドニア人やマケドニア王が、もしも或る神が彼らに将来起ることを予言したとしても、ペルシア人が殆んど全世界に君臨しているのに、ペルシア人の名前さえ今日まで保存されることなく、以前には名前さえ知られていなかつたマケドニア人が全世界を征服するということを信じたとは思わないでしょう。しかしテュケーは、……今度も私の意見では、マケドニア人にペルシア人の財産を受継がせることによつて、彼女が別のことを計画するに至るまで、彼らにその財産を貸しているに過ぎないことを全人類に示しているのです。

ここに既に、超自然的力たるテュケーを想定して諸帝国の継起を考える思想が起つているが、更に恐らくこの思想の影響を受けて、ポリュビオスはローマの世界支配をテュケーの作用に帰したのであつた。[7] そして彼は、ローマの世界征服をこれまでの強国たるペルシア・ラケダイモン・マ

ケドニアと比較し、すべてを越えていると説いた。[5] 更に前一世紀のディオニュシオスや後二世紀のアピアノスは、ローマ史を扱うに際して、これまでアッシュリア・メディア・ペルシア・マケドニアという諸帝国が興亡し、最後に殆んど完全なる世界帝国たるローマの支配が起つたと述べ、世界史のうちにローマ帝国を位置づけているのである。[9] 即ち、最後に綜合されたギリシア的世界史像は、単純化された形では、アッシュリア以来の諸帝国継起の姿となる。そして後述するトゥログスによつて、この特長が顕著に現われた世界史叙述がなされている。

このようにペルシア・マケドニア・ローマの興亡を見て、アッシュリアやメディアの興亡を想起したのは、既にヘロドトスやクテシアス、特に後者によつて、アッシュリア・メディア・ペルシアの継起が述べられていたからである。[10] ヘロドトスはペルシアを旅行してそのような歴史像を聞知したのであろうし、とくにクテシアスはアルタクセルクセス二世の侍医として滞在していた間にペルシア人から学んだのであろう。ともかく、アッシュリア・メディア・ペルシアという帝国継起を考えるのは、明らかにペルシア人の見解であつたであろう。[11] 従つて、ヘロドトスやクテシアスを通じて伝えられていたペルシア的な帝国継起の歴史像が、ヘレニズム時代の頃に、マケドニアやローマの継起と結合されて、アッシュリアからローマに至る世界帝国継起の歴史像となつたのである。

① Diodorus Siculus, I, 3.
② F. Jacoby, *FGrH*, II C, S. 233 f.
③ Ibid. S. 231 f.
④ ヘロデ王に関するヨセポスの記述はニコラオスに依拠したと考えられるから。
⑤ Flavius Josephus, *De Bello Judaico*, I, 13–15.
⑥ *FGrH*, Nr. 228 F 39 〔=Polybius, XXIX, 21, 4–6〕
⑦ Cf. J. B. Bury, *The Ancient Gr. Historians*, pp. 200–203.
⑧ Polybius, I, 2.
⑨ Dionysius Hal., *Antiq. Rom.* I, 2. Appianus. prooemium, 9–10.
⑩ Herodotus, I, 95 ; 130. Ctesias, *Persica*.
⑪ Cf. J. W. Swain, *The Theory of the Four Monarchies*, Class. Philology, XXXV, 1940, pp. 5–7.

七

ところで上述のギリシア的世界史像は、ギリシア人の間

ばかりでなく、他の民族（ローマ人）の間に受容され、後続する時代の歴史が付加されて発展して行くことになつた。このことは、昔の日本人が多くの文化を大陸から輸入し、しかも中国の史書を手本として自国の歴史叙述を始めたにもかかわらず、中国の歴史学の成果を受容して、中国史と日本史とを統一しようと試みもしなかつた事実と比較して、注目すべき特長である。

例えば紀元後一世紀のユダヤの史家ヨセポスが、世人はギリシア人の書いた歴史書しか信用しないという意味のことを述べている如く、[1] いわゆるグレコ・ローマ時代にはギリシアの歴史学が世界中に通用し、各国の歴史伝承を圧倒しようとしていた。従つて、ギリシア文化の支配下に入つたあらゆる民族に、ギリシア史学の成果を受容する可能性はあつたとも考えられる。しかし、ギリシア文化の波及に伴つて、異民族の者がギリシア史学の影響を受けて、ギリシア語で歴史を書くことになつても、その対象は自身の国の歴史であるのが普通であつた。既に紀元前五世紀にリュディア人クサントスがギリシア語で『リュディア史』を書いているのが、その最初の例である。ヘレニズム時代のベロソスの『バビュロニア史』やマネトンの『エジプト史』は、それぞれ自国の歴史伝承をギリシア語に訳したものである。また前述のヨセポスの『ユダヤ戦争史』は、同時代史記述の方法をギリシア史学から完全に受継いでいるが、しかし彼は古代史の面では、『旧約聖書』を歴史書の形式にして訳して『ユダヤ古代史』を著し、ギリシア史学の成果に挑戦したのである。更にローマ人の歴史叙述は、第二次ポエニ戦争の頃にギリシア史学の影響下に誕生し、最初は専らギリシア語で記述していたが、その内容は、アエネアス伝説から始まるローマの国家的伝承であつた。[2] 紀元前二世紀の初め頃にローマ人の間へ、アッシュリア・メディア・ペルシア・マケドニアという帝国継起の思想が伝えられた証拠があるが、[3] ローマ人に深い印象を与えたとは思われず、やがて起つたカトー一派の国粋主義の結果、消滅してしまつたようである。[4]

このようにして、各民族にそれぞれ確固として閉鎖的な歴史伝承があつたから、ギリシア史学の成果は容易には受容されなかつた。とくにローマ人のために考え出されたかの如き観のあるギリシア的世界史像が、ローマ人にさえ簡

単には受容されなかつたのである。しかしローマ人の場合には、東方の異民族の場合と異り、なお受容の条件があつた。

上述のヘレニズム世界で記述された東方人の歴史書には、自分の国が古い歴史を有することをギリシア人に誇示しようというような意図があつた。このことは、ヨセポスの著書に明白に現れており、また一般的にはディオドロスの次の如き言葉から知られる。[5]

民族の古さについては、ギリシア人ばかりでなく異民族の多くも論争し、自民族が生え抜きであり、生活に必要なものを全人類のうちで最初に発明した者であり、その歴史は最も古い時代から記録に価いすると、それぞれ主張している。

この言葉からも知られるように、この頃には、ギリシア人も東方人の如くに回顧的になつていた。古典期のヘロドトスやプラトンやエプォロスは、オリエントにこそ古い歴史があることを素直に認めていたが、[6]ローマ時代のディオドロスやディオゲネス＝ラエルチオスは、ギリシア神話をも歴史と見なしてしまい、ギリシアにこそ却つて古い歴史があるのだと述べている。[7]オリエントの諸民族にせよギリシア人にせよ、このように回顧的になつてしまつては、歴史像を更に発展させて行くことはできない。それに対してローマ人は、歴史の古さを主張するには余りにも明白に後進国であつた。かのアエネアス伝説に見られる如く、祖先を先進国と関係づけることができたに過ぎない。

かくてアウグスチヌスも述べている如く、ウァロ（一一六―前二七）その他のローマの歴史家たちは、ローマ人の起源を述べる場合に、「時間の経過を、ギリシア人からラテン人へ、そしてラテン人からローマ人へという順序で追つた」のである。[8]このような仕方でギリシア史とローマ史とを結合することは、ギリシア人の側からもなされた。即ちハリカルナッソスのディオニュシオス（前七以後死）は、その『ローマ古代史』において、ローマ人はバルバロイだとのギリシア人の通念に反対して、ローマ人はギリシア起源であり、しかもギリシアの制度を早くから採用していたと説いている。[9]ともかく、このようにしてローマ人は自らをギリシア人に後続する者として意識したのである。そしてウァロの『ローマ国民の種族について』と題する書物において、そのような視野をもつた世界史像の構成がな

されていたと考えられる。ケンソリヌスを通じて知られる限りでは、そこでは次の如き三時代区分がなされていたからである。[10] 即ち、人類の誕生からオギュゴス王時代の大洪水までの最古期、それ以後から第一オリュムピア紀年までの神話的時代、最後にそれ以後から彼の時代までの歴史的時代というように。オリエントの歴史にまで言及したかどうか不明であるが、ともかくギリシアの古史が非常に詳しく扱われ、そこからローマ史へと移つたのであつて、ローマ史を世界史の中に位置づけようとの意図は明白である。[11]

① Fl. Josephus, *Contra Apionem*, I, 6.
② Quintus Fabius Pictor(fl. 215), Lucius Cincius Alimentus (fl. 210), Caius Acilius (fl. 155)
③ Velleius Paterculus, I, 6. 6 に引用された Aemilius Sura の断片にそれが見られる。
④ J. W. Swain, *The Theory of the Four Monarchies*, Class. Philology, XXXXV, 1940, pp. 2-5.
⑤ Diodorus Siculus, I, 9, 3.
⑥ Herodotus については第三節参照。Plato, *Timaeus*, 21-23. *FGrH*, Nr. 70 (Ephorus) F 106.
⑦ Diodorus Sic., I, 9, 5; IV, 1. Diogenes Laertius, prooemium.
⑧ Augustinus, *De Civitate Dei*, XVIII, 2.
⑨ Dionysius Hal., *Antiquitates Romanae*, I.
⑩ Varro, *De Gente populi Romani*. Censorinus, *De die natali*, 21, 1.
⑪ C. Wachsmuth, *Einleitung in das Studium der alten Geschichte*, 1895, S. 145. M. Schanz, *Geschichte der röm. Literatur*, I, 2 (1909), S. 436.

八

上述の如くギリシア史とローマ史とが結合されたばかりでなく、ギリシア的な世界史像もそのままの形でローマ人の間へ伝達された。即ちアグウストッス時代のガリア系ローマ人ポムペイウス＝トッログスが、『フィリポス史』(Historiae Philippicae) と題する世界史を書いた。この書物はアウグスチヌスの頃には既に失われてしまつていたらしいが、[1] 内容目録(Prologi)と、ユスチヌス（三世紀頃）による要約（Epitoma）とが伝存している。これらによると、トッログスの歴史の構成は次の如くであつた。

彼はディオドロスの如く歴史の始源にまで遡ることをせ

ず、アッシュリアのニノス王から始める。この出発点の選択は意識的なもので、ニノスによつて築かれたアッシュリア帝国こそ史上最初の帝国だと考えたからである。そしてアッシュリアからメディアへ、更にペルシアへの帝国支配権の移行に力点を置いて述べ、それとともにニノス王以下の代々の帝王の遠征に関係して、遠征された国々の歴史を記述する。次いでペルシア戦争を経てギリシアへ中心が移り、ギリシア内部の戦争が扱われることになる。以上までは云わば序説で、最初の六巻を占めるに過ぎない。第七巻から本題たるマケドニアの歴史に入り、ヒィリッポス、アレクサンドロスの活躍を詳しく述べ（七―十二巻）、更にヘレニズム諸王国間の戦争を詳しく扱い（十三―四十巻）、最後にローマの歴史を簡単に説明し、アウグストゥス帝の活躍にまで及んでいる。

以上の如く、アッシュリア・メディア・ペルシア・ギリシア・マケドニア・ローマの順での、帝国支配権の継起的移行が、全体の枠を構成しているが、ニノス王からアウグストゥス帝に至るまでの帝王や国家の遠征と関連して、遠征されたりした国々の歴史を遡つて記述しているので、殆んど世界中の知られている限りの国々の歴史をすべて編み込んでいるのである。最後の巻では、アウグストゥスの遠征と関連して、ヒスパニアのことが扱われているが、そこでは

ヒスパニアは、エウロパの限界を鎖しているが、そのようにこの著作の結末ともなるであろう。

と述べられている。[2] 即ち、東方に始まつた歴史が、遠征などによつて次第に範囲が拡大し、西方へと展開して来て、ヨーロッパの限界に達する。そのような歴史の時間的・空間的な構成が意識的に把握されていたようである。

かくて極めて優れた世界史の構成が見られるのであるが、トゥログス自身が考え出したものかどうか問題がある。グートシュミットは、これには非常に多くの系統の史料がモザイクのように組合わされており、非常な博読が必要であつたこと、また一般のローマ人の史書とは異つた反ローマ的解釈が見られることなどを根拠として、或るギリシアの歴史家の著書を彼は殆んど翻訳したに過ぎないのだと推定し、その原本は恐らくティマゲネス（前一世紀中頃）の『諸王史』（*Basileîs*）だと想定した。[3] この説に対しては、ワクス

ムートが直ちに反対し、トゥログスは多分ティマゲネスに依拠したであろうが、その外にエプォロス、テオポムポス、ティマイオス、プュラルコス、ポリュビオス、ポセイドニオスをも、独自に利用したと説き、彼の歴史の全体的構成は彼自身が考え出したものであることを、疑うべき理由はないと主張した。[4] しかし、この反対論は人々を余り説得せず、グートシュミットの説が今日まで支配的である。[5]

しかし肝心のティマゲネス自身の断片が極めて少数しか存在しないので、この説は全く間接的な推論に基いた仮説に過ぎず、またこの仮説に立脚して見たところで、彼の世界史の構成の意味を考える上には、何も益するところがないのである。それ故に私たちは大局的な見地から考えてみよう。トゥログスは、直接的にせよ、ティマゲネスを通じて間接的にせよ、エプォロスやテオポムポス以下のギリシアの歴史家たちに依拠したことが明らかなのであるから、結局エプォロスなどを通じて更にヘロドトスにまで遡ることになる。従つて彼の世界史の構造は、ヘロドトス以来のギリシア史学の成果が或る仕方で綜合された結果として成立したものだと考えるべきである。事実、トゥログスの著書がギリシア史学に対してもつ関係が上述の如きものであることは、ユスチヌスの序文のうちにも暗示されているのである。そこでは次のように言われている。[6]

ギリシアの歴史家たちは、各々自身の便宜に応じて、お互いに分け合つて、役立たないものは省いて、扱つたが、それらすべてをポムペイウスは時代によつて分け、そして事柄の順序に従つて配列して、まとめたのである。

この言葉の意味は不明確ではあるが、ともかく意味するところは、ギリシアの歴史書は各時代や各地のことを扱つた専著であつたが、トゥログスはそれらを整理し綜合したのだというのであろう。

しかし前述の如く、少し以前に書かれたディオドロスの歴史も、ギリシア史学の成果を綜合したものであつた。しかるにトゥログスの方に遙かに明確な歴史構成の原理があるとすれば、その相異は如何にして生じたのか。ここにおいて想起されるのは、トゥログスはいわゆる「四大世界帝国説」に基いて構成したのだという、トゥリーバーやスウェインの説である。[7] もつとも両者の説には根本的な相異も含まれている。トゥリーバーは、アッシュリアの滅亡とマ

ケドニア・ローマ・カルタゴの建国とを同年代におこうとするギリシア年代学の傾向を根拠として、かの説の起源をギリシアにありとし、そこからローマに入つて、トゥログスに影響を与えたという。それに対してスウェインは、かの説を窮極的にはペルシア起源とし、そこから一方ではパレスチナへ入つて『ダニエル書』に表現されるとともに、他方では小アジアなどを経てローマに入つたとする。このように「四大世界帝国説」の起源や性格について不明確な点が多いので、彼らの説は一つの想像に過ぎない。しかも、トゥログスがこのような特殊な歴史観に依拠していたと想定しなくとも、彼の歴史の構成原理はギリシア史学の伝統のうちから理解されるのである。

既に見た如く、ディオドロスやニコラオスにおいても、オリエントから始まつて、ギリシア・マケドニアを経てローマに至る歴史像は、ほぼ明白になつていた。これらと比較してのトゥログスの特長は、代々の帝王の支配を中心にして述べ、それらの帝王の遠征に関係して、各地の歴史を挿入するという方法を徹底的に一貫して用いた点にある。この方法そのものは、前述の如く、ヘロドトスの創始したものであり、またテオポムポスに受継がれていたものであつた。ところで、トゥログスの著書は『ピィリッポス史』(Historiae Philippicae)という特殊な題名であるが、これは明らかにテオポムポスの『ピィリッポス史』(Ἱστορίαι Φιλιππικαί)から由来するのであろう。そして、この題名のもとにピィリッポス以後を含めた全世界史を扱つている事実は、テオポムポスを通じて学んだ原理を全世界史に及ぼしたのだということを、端的に暗示している。広い範囲の時間的視野をもつて臨んだから、ヘロドトス的方法が幾重にも重ねられることになり、帝国支配権の継起的移行も顕著に現れることになつたのであろう。

従つてトゥログスに見られる歴史の構成は、ヘロドトス以来の政治史的世界史把握の原理とでも言うべきものの発展した形態なのである。それに対してディオドロスの構成は、そのような政治的感覚に基くものではなく、前述の如く、年代学に基いて為されたものであつた。この年代学は、ヘレニズム時代にエラトステネス(前三世紀)によつて確立され、アポロドロス(前二世紀)に受継がれていたものである。このようなアレクサンドリア風の学者的な方法が適用

されたために、ギリシア史学の伝統的な構成原理が弛んでしまつたのであろう。

① R. B. Steele, *Pompeius Trogus and Justinus*, American Journal of Philology, XXXVIII, 1917, pp. 26 f.
② Justinus, XLIV, I.
③ A. von Gutschmid, *Trogus und Timagenes*, Rhein. Museum, XXXVII, 1882.
④ C. Wachsmuth, *Timagenes und Trogus*, Rhein. Mus. XLVI, 1891.
⑤ この説を支持する人としては、例えば F. Jacoby (*FGrH*, IIC, S. 220f.) R. Laqueur (Pauly *RE*, VI, A, 1, 1066) J. D. Denniston (*Oxf. Class. Dict.* s. v. Timagenes)。
⑥ Justinus, praefatio, 3.
⑦ C. Trieber, *Die Idee der vier Weltreiche*. Hermes, XXVII, 1892. J. W. Swain, *The Theory of the Four Monarchies*, Class. Philology, XXXV, 1940.

九

かくて、ギリシア史学の主流によつて形成されて来た世界史像は、却つてラテン語世界の方に本来的な特長を保つた形で伝えられたのである。しかし、トゥログスの著書は異教時代のローマ人によつて果して消化されていたのか疑わしい。彼の歴史は、愛国的でローマ中心的なローマ史学の一般的性格から全く孤立した性質のものであつた。普通に言われているように、リウィウスが一般のローマ人の歴史観をほぼ決定していたとすれば、トゥログスの著書は全く付属的な位置をしか占めなかつたであろう。事実、ほとんど読まれた形跡がないのである。ところがキリスト教時代に入ると、ヒエロニムスやアウグスチヌスやオロシウスなど、キリスト教的歴史観の形成に大きな役割を果した人々の間では、ユスチヌスによる要約が重要な参考書にされている。[1] そして、この要約は中世から十八世紀頃に至るまで、世界史概説書として重視され続け、ヨーロッパ人の世界史像形成に大きな影響を与えたのである。[2] 即ち、ギリシア的な世界史像は、キリスト教の媒介を経て、後のヨーロッパに伝えられたのであつた。言うまでもなく、ギリシア人の歴史観とキリスト教のそれとの間には、全く根本的な相違があつたのに、ギリシア的世界史像は何故キリスト教と結合し得たのか。

まず『旧約聖書』の内容を見ると、そこには創造以来の世界の歴史が書かれているはずなのであるが、大部分はイ

スラエルとユダヤの歴史が中心で、この遷民たちの運命に直接に大きな影響を与えたアッシュリア、バビュロニア、ペルシアなどの歴史については、ほとんど何も書かれていない。ただ、これらの国々の誰々という王が改めて来たというようなことが書かれているに過ぎない。『旧約聖書』を書いた人々は、それらの外国のことを詳しく知つていたから、自明のこととして書かなかつたのであろうが、しかしローマ帝国のキリスト教徒には聖書の語る歴史はそのままでは理解し難かつたに相違ない。そして、これらイスラエルの周囲に興つた強国の歴史を知るためには、ギリシア史学の成果が極めて適当な参考書となつたことは当然である。

とくに重要な例は、『ダニエル書』に書かれている世界の終末までに継起するはずの四つの帝国についての予言の解釈である。この四つの帝国というのは、予言の言葉を注意して読めば明らかなように、新バビロニア・メディア・ペルシア・マケドニア（ギリシア）を指す。しかし聖書には、これらの帝国が継起した歴史をどこにも明白には記述していない。それでキリスト教徒は、聖書からではなしに、むしろギリシア史学の成果に依つて解釈した。即ち、メディアは省くか、ペルシアと合体させるかして、最後の帝国をローマ帝国としたのである。この解釈は、知られる限りでは、ローマのヒッポリュトス（三世紀初）の『ダニエル書注釈』に初めて見られ、以後の通説になるのである。[3] ところが、このような解釈の場合にギリシア史学の成果に依拠していたことは、エウセビオスの解釈が示している。彼は、四帝国をアッシュリア・ペルシア・マケドニア・ローマと解釈しているのである。[4] ヘロドトス以来、ギリシア人はアッシュリアとバビュロニアとを明確に区別することができず、両者を一緒にしてアッシュリアと呼ぶ場合があつた。聖書そのものは両者を明確に区別しているのに、ギリシア史学の誤つた面が聖書解釈に持ち込まれているのである。

このように単に聖書を理解するためにさえ、ギリシア史学の成果を参考にしなければならなかつた。従つて、アウグスチヌスがローマという世俗帝国の意味をキリスト教の立場から解明しようとして、アッシュリア（バビュロン）帝国にまで遡つたとき、ニスチヌスの要約を参考にしたのは当然のことであつたと言えよう。

しかも、このようにギリシア史学の成果を、聖書を補うものとして利用する場合に、両者の間に大きな矛盾が起るということがなかつたのである。即ち第一に、『旧約聖書』による世界年代とギリシア年代学との間に矛盾が生じなかつたこと。初期のキリスト教徒が歴史に関心をもつたのは、主として終末論と関係した世界年代の算定のためであつたが、『旧約』に依拠した年数計算ではアダムから当時まで僅かに五千数百年に過ぎなかつた。ところがエジプトでは、一万年以上も以前から星の観測がなされていたと伝えられいたから、アウグスチヌスは聖書の世界年代計算に立脚して、これを反駁しなければならなかつた。[6] またベロソスの『バビュロニア史』では、大洪水以前の諸王からアレクサンドロス大王の死まで、実に四十六万八千年以上であつた。[7] 『旧約』の内容はエジプト史やバビュロニア史と関係があつたから、マネトンやベロソスの著書はキリスト教徒に利用されたけれども、結局その歴史像は受容され得なかつたのである。それに対してギリシアの年代学では、古く遡つてもトロイア戦争以後の年代計算をなしたに過ぎなかつた。従つて、『旧約』に最古の歴史が語られていると信じたキリスト教徒は、聖書の権威を損わずに、ギリシア史学の成果を採用することができたのである。

またギリシアの歴史家たちは、『旧約』に言及されている諸強国の歴史を比較的詳しく扱つていたけれども、『旧約』自体が詳しく扱つているイスラエルやユダヤの歴史は、殆んど扱つていなかつた。ギリシアの歴史家たちは、客観的に世界を見渡すことはできたが、彼らが注目したものは、強大な政治権力や大建造物や珍奇なものなどだけであつた。そのような傾向のために、アレクサンドロスの遠征以前には殆んどユダヤ人の在存にさえ気づかなかつたほどである。ギリシアの歴史家たちが西洋文化のもう一つの源泉となつた民族の重要性を評価し得なかつたことは、ギリシア史学の一つの欠陥の現れだと言えよう。ところが、かかる欠けた面の故に却つて『旧約』と矛盾が起らず、両者は結合され得たのだとも考えられる。何故なら、ギリシア史学にイスラエルやユダヤの歴史が詳しく扱われていたとすれば、それは決して『旧約』の内容とは一致しなかつたであろうから、キリスト教徒はギリシア史学の成果を正面から排撃することになつたであろうと思われるからである。

以上の如き理由によつて、トゥログスに代表されるようなギリシア史学の成果は、キリスト教徒に受容された。キリスト教徒がこれを為し得たのは、もちろん民族や国家の限界を越えて、人類全体の運命を考えることができたからである。しかし、ギリシア史学の成果を生み出した精神的傾向、即ち簡単に云えば、自然的意味での世界全体を追究し、内外の強大な政治勢力を学的に研究する態度、そのような面は決して受継がれ得なかつた。かくて成果の形だけが受容されたから、古代史の部分は広範な世界史であるのに、中世以後はヨーロッパ、とくに西欧中心になるという、首尾一貫しない歴史像が成立することになつたのである。

① ヒエロニスムは『ダニエル書』解釈のための参考書として多くのギリシア・ローマの史書とともに、この書を挙げている。(*Comm. in Danielem*, prologus)。アウグスチヌスはユスチヌスから引用している(*De civitate Dei*, IV, 6)。オロシウスにとつてもユスチヌスは重要な史料であつた(*Historiae adversum paganos*)。

② 拙稿「西洋史学の源流」(『歴史教育』、七巻六号)十八頁参照。

③ Hippolytus, *In Danielem*, IV, 2–5. Hieronymus, *Comm. in Danielem*, Capp. II, VII.

④ *Scholia in Danielem* (cap. II. v. 31) に引用されたEusebius, *Demonstratio evangelica*, XV からの断片(Migne, *Patrologiae gr.* X, 673–676)

⑤ Herodotus, I, 178 : τῆς δὲ Ἀσσυρίης……τὸ δὲ οὐνομαστότατον καὶ ἰσχυρότατον……ἦν Βαβυλών. Augustinus, *De civitate Dei*, XIX, 24 : de illa priore Babylone Assyrioum.

⑥ Augustinus, op. cit. XVIII, 40.

⑦ Ed. Schwartz, *Griechische Geschichtschreiber*, S. 194. [=Pauly, *RE*, III, 313]

(付記) 本稿は第九回日本西洋史学会大会で発表した原稿に加筆したものである。紙数が限られているので、大略のことしか述べられないわけであるが、それにしても、本稿の如き題名をかかげる以上は、ギリシアの主要な歴史書をすべて一応は通読しておくことが義務だとも思われる。筆者はそのように務めて来たが、必ずしも面白い書物ばかりではないので、重要だと思われる部分だけしか読まなかつた場合が多く、元来の企ての半分も果し得なかつた。従つて、本稿において当然とり上げるべき事柄を見落している場合もあるかも知れない。しかし、あまりにも広範囲な問題であつて、窮まるところがないので、ここで一応まとめてしまうことにしたのである。

なお付言すれば、筆者はギリシア史学の性格を考える上で、ブルクハルト、ビュァリ、ヤコビィなど現代の学者の外に、ユダヤ教の立場からギリシア史学を批判したヨセポスの『アピオンへの反駁』からも大きな暗示を受けた。

tance between two seasides and yet the location of Corbrige as the fort was chosen as geographically better situation. Secondly, we can find the Location of main Roman towns were chosen also the terminal point of river navigation or of tide. In such case, the settlement usually situated on the Terance like high flatface. Thirdly, we can find even now many modern town plannings succeeded from the Roman Age. I explained such cases in Colchester, Gloucester, Chester, etc.

In general the study of Roman town are similer with that of ancient local capitals in Japan. My another purpose of this monograph was the study of comparative historical geograp hy between Japan and England.

Greek Image of World-History

——Its Formatin and Transmission to the Latin West——

by

Kenzō Fujinawa

In European image of world-history, history develops from Oriental Empires to Greece and Rome, and then to medieval and modern Europe. Outside of Europe we cannot find such image of history. For example, in the Far East the Japanese historians before the acception of European historical science did not connect the history of Japan with that of China, inspite of the fact that Japanese history had begun under the cultural influence of China. In this paper the writer tries to explain, why in Europe such image of history has been formed.

The image derives is origin from the ancient Greek historians. In Greece, history as a science begins not with the narration of Greek history, but with the description of foreign countries. From this origin onward, Greek historical science has as a rule a keen interest in world-geography and foreign powers. When Persian, Macedonian and Roman powers in turn threatened Greek independence, some contemporary historians chose these powers as their main themes. In the first century B. C., when Greek independence was utterly lost, some Greek historians compiled world-histories, relying on the main historians up to their times, and a Roman historian named Pompeius Trogus also wrote a world-history in Latin, copying one or a few Greek models. In these works, especially in the last, European image of world-history reaching Roman Empire is clearly seen. The

Latin Fathers and the medieval Christians regarded the Epitome of Trogus' work by Justinus as the most authoritative book of secular history. Thus Greek image of world-history has been naturally accepted by medieval and modern European historians.

Regional Study of Census-taking in the First Year of *Ta-t'ang-t'ien-pao* (大唐天宝)

by

Kaizaburō Hino

According to the census-taking in the first year of *t'ien-pao* (天宝) of *T'ang* (唐) (742), great difference can be found in the population rate by *Tao* (道)' the highest administrative district, and greater difference by *Chou* (州) ; for example, the average of a *Chou* (州) came up to even 120 a house ; this did not mean the greatness of a family but the incorrect investigation of the census by the tax-book which was made the political consideration by *Tao* (道) and *Chou* (州) authorities to adjust the difference of tax burden for each class, light to the rich and heavy to the poor.

More accurate *Tsi-chang* (籍帳) which the authorities of *Chou-hsüan* (州県) made for their own use, to say nothing of *Chi-chang* (計帳), listed even far less than real population.

Administrative Structure of *Shu-han* (蜀漢)

by

Naosada Kano

Officials from *I-chou* (益州) could hardly be found in the higher officialdom in *Shu-han* (蜀漢) but those from *Chi-chou* (荊州) played a most active part in it. Most of officials, concerned with *Shang-shu* (尚書) as a core of *Shu-han* (蜀漢)'s political system, and especially the highest official, appointed to *Ch'eng-sian* (丞相), *Ta-se-ma* (大司馬) or *Ta-chiang-chun* (大将軍) with *Lu-shang-shu-shih* (録尚書事) and *Ling-i-chou-tz'u-shih* (領益州刺史) were not natives; contrarily, most of natives from *I-chou* (益州) were appointed to subordinate country-officicals whose surname just coincided with the list of great surname in *Hua-yang-kuo-chih* (華陽国志) compiled in the *Chin* (晋)